

スーザンとベッキー：グローバル時代の『スター誕生!』

わたしの青い鳥
ようこそここへ クック クック
わたしの青い鳥
恋をした心に とまります
そよ風吹いて クック クック
便りがとどけられ
誰よりも幸せ 感じます
どうぞ行かないで このままずっと
わたしのこの胸で 幸せ歌っていてね
クック クック クック クック青い鳥
(阿久悠作詞 中村泰士作曲)

昨年末の紅白歌合戦には、英国の 47 歳の中年女性、スーザン・ボイルさんが登場して、「夢やぶれて(I dreamed a dream)」を熱唱し、話題になった。

インターネット上の報道を見ていると、外国メディアにまでスーザン・ボイルのチームが敗退と報道されていた。チームが敗退とはどういう意味だろうと思ったが、紅組が負けて白組が勝ったことを指すらしい。我々は紅白歌合戦で、どちらが勝つなど、ほとんど興味はないが、番組は対戦形式である。ここに文化摩擦の根源がある、(などということは実は本題ではない。)

残念ながら紅白歌合戦でのボイルさんの熱唱の様子は YouTube では見るできないようだ。YouTube の著作権関係はよくわからないのだが、せつかく世界的話題になったのだから、NHKも YouTube で紅白の宣伝をすればよいのにと、思うが、ここが日本の官僚的組織というものだろう。

欽ちゃんとバンザイなしよ

さてボイルさんは今春に英国のスター発掘番組に登場し、その歌声が YouTube を通して世界的話題になった。ボイルさんは英国の番組の決勝で敗れたが、あまりのプレッシャーに混乱気

味だったという。こんな時に萩本欽ちゃんが出て行って、往年のTVオーディション番組『スター誕生』の決勝のように皆で「バンザイなしよ」をすれば、ボイルさんも慰められたのではないだろうか、と思った人は、…あまり多くないか。

日本のオーディション番組と言えば、何と言っても70年代の『スター誕生!』(1971~1983)である。日曜日の午前中に放映されていたこの番組は桜田淳子、森昌子、山口百恵、ピンクレディー、小泉今日子、中森明菜などの多くのアイドルを生み出した。

司会は萩本欽一であり、一連の番組でお馴染みの卓抜した素人いじりの才能を持って盛り上げていた。当時、長沢純司会で五木ひろしや八代亜紀を生んだ『全日本歌謡選手権』というプロ仕様の番組もあったが、欽ちゃんの司会が、素人っぽいアイドルの生成に寄与したことは間違いない。

スター誕生の評価基準

この素人という点が大事である。スター誕生!の企画者であり、ニコリともしない仏頂面で審査員を務めていた作詞家阿久悠の回想録『夢を食った男たち』(文春文庫)によれば、

審査基準は曖昧で、そこで、自暴自棄の逆説と言われそうだが

「下手を選びましょう。それと、若さを。」

という基準で選ばれていたそう。つまり歌がうまいという「のど自慢」的な評価基準ではなく、違ったものを求めていたという。そしてこの意味でスター誕生を代表する歌手は、若いのが歌の上手い森昌子ではなく、若くて歌の下手だった桜田淳子だというのだ。

また阿久悠はこうも書いている。

1970年代にはまだサクセスという言葉が、光り輝く幻想としてあった。

1980年代も半ばを過ぎると、サクセスは幻想でなくなり、計画にすぎなくなった。(中略)中

流の子女たちからは、もはや、ヒーローもヒロインも生まれなくなるのは、当然なのである。

サクセスを言い替えれば『成り上がり』である。当時『成り上がり』(1978)という題名の本がベストセラーとなった。この本は今年の紅白にもスーザン・ボイルのカウンターパートとして登場したロック歌手矢沢永吉の自伝であり、極貧から大物ロック歌手に成り上がった軌跡を、糸井重里がライターとして描いている。

成り上がりドラマの終焉

この「成り上がり」という点を考えると、ボイルさん騒動がよくわかる。英国の番組を YouTube で見ると、司会者や審査員が当初ボイルさんに対して露骨にバカにするし、観客は顔をしかめたりする。少し驚いた私は、お年寄りに優しい NHK のど自慢のアナウンサーを輸出する必要があるのではないだろうか、と思ったが、しかしよくよく考えるとボイルさんのケースは成り上がりドラマであって、無垢の才能を持つ主人公が周りに虐められている、というシチュエーションになっているのである。「みにくいアヒルの子」と言えばいいのだろうか。そして矢沢がボイルさんのカウンターパートとして出演したことは偶然にせよ、ドラマ性と言う意味で共通しているのである。

幸か不幸か、このような「成り上がり」ドラマは、現在の日本ではもはや成立しない。「若者には夢がない」とか言うが、成り上がりという「夢」がなくなったあとの新しい「夢」がないのだろう。

日本に夢がなければ、海外に目を向ける必要がある。イチローや中田が、過剰にもてはやされたのも、国内ではドラマが盛り上がらないからだ。

韓国ドラマは階級や大家族など「封建遺制」によって、悲恋が生じるというパターンで、設定は金持ちや財閥の生活が多い。それは日本ではリアリティがなく、言ってみれば『渡る世間に鬼はなし』にヨン様が出てくるようなものだろうか。

ベッキー・クルーエルとアイドル

昨年、日本で人気が出てデビューしたのはイ

ギリスのマン島に住むベッキー・クルーエル 14 歳である。「かわいいにもほどがある」というフレーズで売り出されている。もともと「男女」というコミックソングがあり、それを YouTube で見つけたベッキーがダンスを投稿したところ、日本で人気が出てデビューとなったそうだ。

英国の番組で話題になったボイルさんが、インターネットを通して世界中で話題になる。遠く離れた島の少女が、日本のコミックソングに興味を持つ。たしかにグローバル時代である。

「男女」は面白く、ベッキーはかわいい。しかし、やはりドラマがないのではないかと。「才能」プラス「成り上がり」がスーザンボイルなら、スター誕生は若さと成長プラス「成り上がり」であり、ベッキーは若さだけである。

それが良いとか悪いとか言っているのではない。今さら成り上がりでもあるまい。日本の現状は成り上がりを超えたところにあり、それを認識しなくては何も始まらないと思うのだ。

脇田成